

『木俣修読本』を読んで 服部崇

二〇二一年十二月、佐佐木信綱研究会に初参加した。ゲストの野路安伯氏による「川田順―その作品と背景―」と題した講演は聴きごたえがあった。研究会の参加者によるこれまでの研究の蓄積は「佐佐木信綱研究」に読むことができる。ほぼ毎年一冊のペースで、最新号は二〇二一年十月に発行された第十二号「信綱と交流のあつた同時代の人々、弟子特集（その2）」である。著者は、本号に掲載された『佐新書簡』人名索引のための経歴調べに参加する機会を得たが、佐佐木信綱と新村出が生きた時代を掘り起こす作業に心が躍った。

さて、今回、取り上げたいのは、二〇一九年に発行された木俣修研究会『木俣修読本』のことである。あとがきに「本書は、『木俣修研究』全二十冊をもとに、『木俣修読本』として一冊にまとめたものである」と書かれている。「木俣修研究」は、二〇〇八年二月より二〇一七年八月までの十年間に、毎年二冊ずつ木俣修研究会によって発行された、とのことである。同研究会は、二〇〇六年の「木俣修生誕100年記念の会」を契機に生まれた、「形成」解散後の門下の拠り所でもあった、とも書かれている。

木俣修の初期から晩年までを網羅する各人による評論が圧巻である。各評者がそれぞれの歌集をじっくり読む姿勢、一首鑑賞に取り上げる一首の選択の妙に心を打たれた。歌人としての木俣修

だけではなく、過去と同時代に切り込んだ論者としての木俣修も取り上げられている。特に、小高賢「同時代史を書くむずかしさ」は、木俣修『昭和短歌史』(一九六二年)に連載完結、一九六四年刊行)がなぜ一九五〇年(昭和二十五年)前後までで筆を擱いているかについて、その後が生じた「多磨」廃刊(一九五二年)・「形成」創刊(一九五三年)との関連を指摘しており、興味深かった。

『木俣修読本』は読者に木俣修の歌集を読みたいと思わせることに成功している。自分ならどの歌集を取り上げたいだろうか。自分ならどの一首を選ぶだろうか。こうしたことを考えさせられる気分になった。手元にある筑摩書房『現代短歌全集(第十巻)』に木俣修第三歌集『冬暦』(一九四八年)をみつけた。一首に絞り切れずにいるので、ここでは何首か書き写しておきたい。終戦直後の風情が印象的な歌集である。

・倒れたる群の墓石も曼殊沙華もただにかがやき丘の夕光ゆふかげ
 ・いくたびか蜻蛉やんまを捕れとすがり来て幼子はけふもわれをさいなむ

・バラックの裏を来しとき屠られむとする鶏のこゑはするどし
 ・幼子は鮭のはらごのひと粒をまなこつむりて呑みくんだりり
 一首目、市街地も荒れ果てているが、墓地も荒れている。倒れた墓石と曼殊沙華に夕日が当たる。二首目、われをさいなむ、と詠んでいるが、幼子にすがられることに喜びを感じているように思われる。三首目、終戦後の立ち並ぶバラックの景に、今にも屠殺されようとしている鶏の声がかぶさる。四首目、幼子が眼をみつめて鮭のはらごのひと粒をのみこむ様子を観察する。

佐佐木信綱研究会が『佐佐木信綱読本』を編むのはいつになるのだろうか。『木俣修読本』を読んでそのときを思い描いた。